

【書評】

虞萍著『冰心研究——女性・死・結婚——』

(汲古書院、2010 年)

牧野 格子

本書は、中国現代文学を代表する女性作家の一人でありながら、正当な評価を与えなかった謝冰心（冰心とも表記）の再評価を試みる意欲作である。謝冰心評価に関しては、五四時期の重要な作家であるにもかかわらず、その後の社会思潮の変化により批判されてきた。さらに、女性の自立をめぐって、謝冰心作品はそれを阻害するものであると一部の意見が存在する。そうした誤解を解き、反論をするために、膨大な資料を使い、綿密な実証を行っている。

本書の構成は以下の通りである。

序論

第1章 中国における冰心研究の概観

第2章 冰心の日本への旅と日本における冰心研究の概観

第3章 冰心の初期の女性観——冰心の「問題小説」を通して

第4章 生命の意義を考える冰心

第5章 冰心の結婚観——独身主義女性を中心に

結論

I 本書の特徴と意義

本書の目的は、謝冰心とその作品の再評価を「女性・死・結婚」の視点から行うことである。その目的が如何に果たされているか、各章について概観し、その特徴と意義をみていくことにする。

第一章では、1919年の謝冰心の文壇デビューから彼女の死後、近年の評価までをテンポよく、分かりやすくまとめている。著者は「興隆期」「沈黙期」（創作時期 1919年-1930年代）、「低迷期」（1940年-1978年）、「転換期」（1979年（改革開放初期）-1989年）、「新紀元」（1990年代以降）の四つの時代に分けて概観している。

ここからは、謝冰心が五四時期に大いに評価されていたにも関わらず、1920年代半ばの五四退潮期から彼女を批判する言論が見られ始め、30年代にはあまり注目されなくなっていった経緯が分かる。

著者がうまくまとめていることで、謝冰心の対する評価をめぐる大きな矛盾がはっきりとわかるよう

になっている。それは、彼女が中国現代文学を代表する女性作家の一人であり、文学史の中にも必ず現れる人物であるにも関わらず、なぜ文壇や研究界で評価されないのか、ひいては研究の価値すらもないと言われるのか、ということである。

その理由として、謝冰心批判に関する二つの大きな転換点を見出すことができる。一つは1920年代半ば以降からの誤解と批判、もう一つは1980年代のフェミニズム理論による批判である。

一つ目の転換点は、謝冰心評価に長らく影響し続けた。その流れを本書の言に従ってしてみると、1925年、蔣光赤（光慈）による「お嬢様の代表」という評価から始まり、最後には1931年に賀玉波によって「ブルジョワの安逸した生活への賛美」との評価へと定まっていった。1920年代初頭、謝冰心の作品を賛美していた阿英でさえ、30年代には批判している。これは革命文学の台頭によるものであり、左翼思想を通して見れば、どうしても作品中の登場人物やその背景は批判の対象にならざるを得なかった。

二つ目のポイントは、1980年代のフェミニズム理論からの批判である。中国のフェミニズム理論を代表する学者、孟悦・戴錦華『浮出歴史地表——現代婦女文学研究』では、ジークモンド・フロイトの理論を用いて、謝冰心を「大きくなれない娘」と評し、1940年代に謝冰心が『關於女人』を「男士」というペンネームで書いたことについて「秩序に対する屈服」と認識した。

以上の二つの点が、今までの謝冰心批判の主な考え方だと言えるだろう。本書の著者によると、これらの批判は偏った視点からのものだという。ここに本書の意義がある。いずれの視点であっても、それは謝冰心文学の本質の良さを捉えるものではないからである。

この二つのポイントとなる事項を除いては、1970年代後半から中国では再評価の兆しが見られ、多くの謝冰心に関する著作集、研究書が出版されている。この動きによって、謝冰心が中国現代文学を代表する文学者の一人として再び認められたのである。

第二章では、謝冰心の日本での研究と紹介、日本滞在期の再整理を行っている。日本滞在期の謝冰心の作品については、青柳真理氏が8本の佚文を再発見し、修士論文にまとめている。著者は他にも何篇か謝冰心の佚文を発見している。両者が発見したものはすでに日本語に訳されたもので、中国語の原文ではないために、著者自身がそれらを中国語に訳し、『我自己走過的路』として出版している。これらの新発見は、謝冰心研究の新たな提示となるであろう。

他に謝冰心の来日回数と日時、日本で行った対談などを抜粋し、また日本の研究者による謝冰心研究の変遷について整理している。戦前までは謝冰心作品は一定の評価を得ていたが、年を下るごとに評価は下がり、日本の研究者の間では、謝冰心研究の意義を全く認めないことすらある。だが、少なからず謝冰心研究を行った研究者はおり、個別研究を行っている。これらの論文を集約し、まとめなおしたことに、本章の価値がある。さらに、著者自身、日本における謝冰心研究に対するステレオタイプなイメ

ージをもう一度見直し、謝冰心作品の価値を再度見出すことを提起したことにも大いに価値があると考ええる。

第三章は、謝冰心の初期作品に現れる女性観が当時の1920、30年代の中国社会に如何に合致していたかということを論じている。

謝冰心の初期作品の多くは「問題小説」と呼ばれる。この「問題小説」とされるジャンルは、五四時期に多く現れたものである。後の世からは、問題を提起しただけで、その解決法を提示していないと批判されてきた。しかし、著者は後で詳しく述べるが、女子教育の大切さに社会問題の処方箋を求めている。処方箋の元は、謝冰心自身が受けてきた初等、中等教育にあるとしている。

彼女の「問題小説」の代表作として「兩個家庭」が挙げられる。この作品は良妻賢母主義を顕彰したものと捉えられることが多い。しかし、著者はむしろ1898年に梁啓超が提唱した「新良妻賢母主義」に近いものとしている。つまり家庭の中で、夫を助け、子どものしつけもしっかり行い、教養のある女性を理想的に描いている。この女性の理想像が後の批判の原因となったが、ただ「兩個家庭」の物語の終盤に女性の自立が実現できる環境が持てるようにという希望を描いた部分が出てくる。

さらに一歩進んだ女性像として、胡適が提唱した「超良妻賢母主義」を挙げている。これは胡適がアメリカの婦人の観察を経て作り上げた、家庭内の女性の理想像である。それは家庭の範囲を出て、職を持ち自立をしながら、家庭を守る母という像である。

当時、1920、30年代の女性の雇用形態、状況から見て、謝冰心の描いた「新良妻賢母主義」と胡適の「超良妻賢母主義」のどちらが、時代に適合していたのか、膨大な資料を用いて証明をしている。つまりは、女性の雇用が最多であった上海ですら、女性が中層以上の仕事を得ることは非常に難しかったとしている。

他の「問題小説」である「秋雨秋風愁殺人」、「莊鴻的姊姊」、「最後の安息」などを扱い、教育を受けられないまま、「死」という悲惨な末路を迎えていく女性たちを描くことで、謝冰心自身が最も重視していたのは女性教育であり、それが彼女の「問題小説」群の中で、社会の問題に対して提示した「処方箋」であると述べたのは、筆者が従来の批判に対する反論として、導き出した結論であり、この点は特筆すべきものであろう。

第四章は、再び謝冰心の「問題小説」を扱い、「生命」（特に自殺問題）を通して、その意義を問うている。五四時期、中国知識人にとって「人生」や「いかに生きるか」という問題は、最大のことであった。ひいては厭世的になる者もあり、そこからの「解脱」をはかるために、「自殺」という手段に解決を求めたと著者は述べている。

まず、1920年前後の自殺問題にする議論の流れを追ってみている。口火を切ったのは陳独秀で、この

時期に若者の自殺の原因を三種類に分けている。羅家倫と李大釗は自殺したある若者を擁護し、むしろ社会の犠牲者であったといった。それに対し、蔣夢麟、瞿秋白、鄭振鐸は羅と李の意見に真っ向から対立し、自殺は自分の弱さを示す罪悪であると激しく批判し、また、その救済方法を提示した。これらの議論は『晨报』や『新潮』に掲載され、謝冰心もそれらの新聞や雑誌を読み、そうした時代に影響を受けてきたという。

そこから謝冰心の「問題小説」が当時の社会にとって意義あるものであったと述べているのである。たとえば、「世界上有的是快樂……光明」は自殺を図ろうとさまよっていた青年が、子どもの天真爛漫さに触れることで、再び生きる道を模索するという話で、自殺に対する処方箋を提示している。この処方箋が「純、無限」という大自然と子どもの力だとしている。

「文学研究会」入会と前後して、謝冰心は鄭振鐸が提示した「血と涙の文学」によって、そうした作品を書くことを要求される。しかし、謝冰心は妥協をせず、自分のスタイルを通した。

阿英は謝冰心のことを「生命の意義すら分らない」と批判したが、自らの文学を貫き通し、自殺に対し、彼女なりの解決法を提示している。「あくまで自己の文学に忠実でありつつ、同時に人間の苦しみ、喜び、救いを反映する文学」を社会に発信しようとしていたと結論付けている。

第五章は、これまでの謝冰心に対する誤解を解く最も重要な個所だと思われる。ここでは、女性の「独身主義」の視点から、主に1930、40年代の作品を読み解いている。初期の「問題小説」に登場する新良妻賢母の女性像は、1930年代ごろから変化し始めているというのが、著者の論である。

そこで、当時の独身主義女性に対する知識人の考え方について、独身主義女性の形成要因、独身主義女性のタイプ、の二つの視点からまとめている。そして、実際に謝冰心の小説作品「相片」、「西風」の主人公を取り上げ、仕事に生きる女性に対する謝冰心の見方を論じている。

さらに「第一次宴会」から謝冰心の結婚に対する考えをまとめている。結婚生活を経験した謝冰心は、自らの結婚観を定め、徐志摩の起こした婚外恋愛の事件に対し批判をしている。

白水紀子氏はかつて論文で「兩個家庭」から1940年代まで謝冰心の思想が基本的に変化していない」と述べた。その意見に反論すべく、著者は白水氏が『關於女人』後記から引用した箇所をもう一度精査した。そこで、重大な遺漏を発見したのである。白水氏が謝冰心批判の根拠とした箇所「男は仕事に生き、女は愛に生きる」の直後に「愛にすがって生きていくのは、まことに憐れで危なっかしいことでもある」という記述があったと著者は指摘している。そこから、著者は謝冰心が1940年代には結婚生活の現実をよく理解した上で、その結婚観に変化があったとしている。そしてそれを裏付けるために、「悼沈騷英女士」、「對於婦女参政的意見」を取り上げ、夫の事業を支え、子どもを育て、最後は妻自身の事業を成功させるとしている。最後には、「愛神之火」という1947年に香港で出版された作品を取り上げ

た。その作品は謝冰心のものであるとは確定されていないため、あくまで試論として論を立てている。愛にすがって、男性を頼るのではなく、女性の理知をもって経済的に自立すれば、男性に支配されることはないとしている。1919年の「兩個家庭」から、この1947年の「愛神之火」まで、女性観、結婚観は明らかに変化している。それは、「新良妻賢母主義」から、家庭をしっかりと守りながら、自らの仕事にも邁進する女性像へと理想が変化していったということである。この結論は、孟悦や戴錦華のフェミニズム理論からの誤解と批判に対する十分な反論といえるだろう。この点は本書において最大の評価すべきところである。

結論では、第一章から第五章の論点をまとめ、謝冰心の作家精神、文学者として果たした役割、そして現代社会における謝冰心文学の存在の意義を提起している。謝冰心が決して男性に依存した結婚観を持っていたのではなく、自立していない子どもではないことが証明された。さらに、彼女は晩年に至って、家庭は重要な核であり、健全な家庭があつてこそ、健全な国家がある、と主張しているという。中国の行く末にいつも関心を持ち、自ら知識人としての役割を考えたとも述べている。彼女が改革開放以後の中国社会において、人の幸せ、本当の豊かさについて、「利己」ではなく、人と人が慮り合うことが重要であると主張した。ゆえに著者は謝冰心の作品と作家としての精神は現代中国社会において、大いに意義があるのだと結論付けている。

著者の結論からは、謝冰心が70年以上に渡る創作生活において、常に時代と寄り添い、思想も時代に適合させ、変化し成長していったことが分かる。謝冰心を研究することが意味のないことではないどころか、経済高度成長下の中国において、人々が決して忘れてはならない精神であること、それは、今までの謝冰心評価を根底から覆すものであることを筆者も強調して主張したいところである。

II 意見と感想

ここでは、各章における細かい問題と本書全体を読んで感じたことを述べる。

まず、各章の問題について言えば、第一章の謝冰心研究の時期区分について、最後の箇所「新紀元」という言葉には少し違和感を持つ。日本語にとってあまりなじみのないように思える。それぞれ「～期」としているので、「新時期」とでもすべきではなかったか。

第三章で、女性が1920、30年代、経済的自立をするための中層以上の職を得るのが困難であったとの立証をしている。そのため使用している資料は、上海や江蘇など南方都市を対象としたものが多く、当時、謝冰心が住んでいた北平（北京）やその他、北方都市を対象にした資料を使っていない。

謝冰心の「問題小説」における「新良妻賢母」の女性像が、当時の時代に適合していたのか、というのは謝冰心自身が時代の空気を吸って書いていたかということとも言えるだろう。そのためには北平周

辺の都市を扱ったデータを用いるほうが、より説得力があったのではないだろうか。

第五章で、「愛神之火」を扱ったのには、まだまだ疑問が残るのではないだろうか。謝冰心作品であるかどうかまだ確定していないからである。早急に結論を得るのは危険ではないかと思う。筆者も 2002 年にプリンストン大学でこの作品集を見つけたが、内容を見ると、謝冰心が書いたものにしてはいささか俗な印象を受けた。1930 年代には謝冰心の名を騙って書かれた海賊版の本もあったというので、その作品集はその一つなのだろうと筆者は考えていた。

だが、謝冰心の徐志摩に対する批判文、1940 年代の文章や、彼女一家が置かれていた状況、結婚生活の実態を鑑みると、「愛神之火」が謝冰心の筆によるものとの可能性もあるとはいえる。(注 1)

全体の問題としては、謝冰心研究の自らの提言について一つ述べたい。

謝冰心研究に関しては、2009 年に萩野脩二著『謝冰心の研究』が出版されている。これは日本で最初の謝冰心研究書である。

萩野氏の著書に収録されている「冰心と大海」で、一定の再評価がなされたと筆者は考えている。萩野氏は、「もの」と「こと」という概念を用いて謝冰心の文学を読み解いた。従来、謝冰心の価値を認めなかった文学者、批評家たちが自分自身の理論で説明してきた。その方法は果たして謝冰心の文学の良さを認める上で有効ではなかった。「こと」という概念については、萩野氏は「作品中の題材や人物」とし、「もの」は「作者が表現したいもの」であり「仮に文学性というなら、この文学性によって、作者は時代を経ているのだろう」と述べている。つまり、謝冰心の文学は、理論や理念を通して評するというよりも、感性や情感を通して見るほうがその良さを認められるのではないかと提起している。マルクス主義理論、革命文学や最近ではフェミニズム理論とは別のところに、謝冰心の価値が見出せるのである。

筆者(牧野)は萩野氏の上記の意見に賛成である。謝冰心作品のキーワードと言われる「母愛、自然、童真」の中でも、「母愛」と「童真」が特に批判される要素である。それは「母性」をめぐる問題と大いに関わってくる。謝冰心の描く「母の愛」、「母性」が、女性の役割を押し付けるものとして批判される。だが、彼女が無邪気に讃える「母性」は完全に悪なのか、その良い要素を謝冰心は訴えたかったのである。その良さは理屈ではなく、人間存在の根源的なものであり(萩野氏はそれを「プリミティブ」と名づけた)、感情の奥底に通じるものなのであろう。

本書は謝冰心の女性観が依存的ではないと証明するため膨大な資料を用い理論立てた。それらの資料は時に少し根拠として弱かったり、多すぎて冗漫になったりすることもある。さらに日本語の面で、言い回しが自然でない箇所も散見される。より丁寧に慎重にチェックする必要があったものと考えられる。

本書の目的は、論理で謝冰心とその作品の良さを証明したことで果たされている。さらに現代の中国において、謝冰心が晩年に表明した知識人としての自負がその存在価値を高めていることは理解できる。

ただ、謝冰心の初期小説である「問題小説」やその後の作品の核心がそれぞれの時代に適合していたということだけでなく、時を超えて生き続ける価値と良さを見出すことはできないだろうか。上で述べたように、それは萩野氏が行った手法であつたろうし、さらに感性や情の部分で読むことによってそれが可能ではないかと筆者は考えている。

いずれにせよ、多くの中国、日本の研究者が持っているステレオタイプ、誤解を正す上で、本書は重要な研究であるということを強調したい。実のところ、筆者は2004年に謝冰心のアメリカ留学時期を中心に研究した博士論文を関西大学に提出している。そこでこれまでの謝冰心評価の整理、謝冰心作品の価値の提起などを行ったが、個別的、断片的な研究に留まってしまった。さらなる研究の進展を目指し、別の形で発表を検討中である。今回、虞萍氏が中国、日本での研究リストを作り上げ、研究史をまとめあげ、論証にまで至っていることに、彼女の努力と心意気を褒め称えたい。それと同時に今後謝冰心研究がさらに発展することを願うばかりである。

注1 虞萍著『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』の冰心佚文の可能性について——「文化生活出版社」を手がかりにして」(『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第41号、2011年8月)で、これらの作品集の真偽を検証している。「文化生活出版社」や発行人である「吳文林」、『文学叢刊』の主編である巴金と謝冰心の交流の観点から探求している。また日本で所蔵されているこれら作品集の中で、特に東京大学東洋文化研究所倉石文庫所蔵の『象牙之夢』、『愛神之火』に押されている「贈呈」の印から、謝冰心が東京に滞在していた時期に倉石武四郎に送ったものである可能性が高いとしている。これらの状況から『象牙之夢』、『愛的靈魂』、『愛神之火』が謝冰心の佚文である可能性を指摘しているが、完全に証明するものではない。ただその可能性は高い。今後作品の内容にまで踏み込んだ更なる検討が必要となるだろう。

